

状態自尊感情尺度の開発^{1),2)}

阿部 美帆 今野 裕之
筑波大学大学院人間総合科学研究科 目白大学人間学部

本研究の目的は、状態自尊感情尺度の開発である。尺度は、Rosenberg (1965) の自尊感情尺度 (山本・松井・山成, 1982) を参考にして作成された。研究1では、尺度が高い内的一貫性を有することが明らかにされた。また、状態自尊感情は他者から受容もしくは拒否されているといった感覚と関連することが示された。研究2では、評価的フィードバックを用いた実験を行なった。その結果、肯定的な評価に伴って状態自尊感情は上昇し、否定的な評価に伴って状態自尊感情は低下することが明らかにされた。研究3においては、構成概念妥当性の検討のために不安との関連を検討したところ、状態自尊感情と状態不安との間に有意な負の相関が示された。以上から、状態自尊感情尺度の信頼性および妥当性が確認された。

キーワード：状態自尊感情, 信頼性, 妥当性

問題と目的

自尊感情は他者からの評価や課題遂行結果に伴って変動するものとして捉えることができる。たとえば、James (1892 今田訳 1992) は自尊感情を“自尊感情=成功/願望”と定式化し、個人が重要であると考えている領域 (学力や魅力など) における成功体験によって自尊感情は上昇し、失敗体験によって低下すると述べている。具体的には、学力に対して高い願望を持つ人物は、テストで良い成績をとった場合には、自らの能力を高く評価し肯定的な感情を経験し、テストで悪い成績をとった場合には、能力を低く評価し否定的な感情を経験するであろう。自尊感情の文脈で捉えれば、良い成績をとった場合に自尊感情は上昇し、

悪い成績をとった場合には自尊感情が低下したと捉えることができる。このように、自尊感情の変動は誰もが経験している心理的現象であり、変動の規定因や変動による生活行動の変化は興味深い研究対象になると考えられる。しかし、これまでの自尊感情研究は個人の自尊感情を特性的に捉え、その高さと他の心理的特徴との関連を検討してきたものが多く (遠藤, 1999), 自尊感情を状況との関連で捉え、その変動を議論することは少なかった。

近年になって、自尊感情を状況との関連で捉えた研究が増加している。たとえば、Leary, Tambor, Terdal, & Downs (1995) は、自尊感情を現在の自分が他者から受容もしくは拒否されていることを示す主観的指標と捉え、他者から受容されている感覚によって自尊感情が上昇し、拒否されている感覚によって自尊感情が低下することを実証している。Kernis, Grannemann, & Barclay (1989) は、自尊感情を短期間で変動するものとして捉え、個人内の自尊感情の安定性を取り上げている。彼ら

- 1) 本論文作成にあたり、松井豊教授 (筑波大学) にご指導いただきました。深く御礼申し上げます。
- 2) 本論文は、『パーソナリティ研究』第14巻1号 (2005年) のショートレポートとして発表したものを加筆・修正したものである。

は、同一対象者に対して複数回自尊感情尺度による測定を実施し、個人内平均を自尊感情の高さの指標とし、個人内標準偏差を自尊感情の安定性の指標として扱った。分析の結果、自尊感情が高くかつ不安定な人物が最も怒りや敵意を感じやすいことを明らかにしている。さらに、援助行動によって現時点の自尊感情が回復するかどうかを検討した研究(清水, 1994)や、社会的比較が現時点の自尊感情にもたらす影響について検討した研究も発表されている(磯部・浦, 2002)。

したがって、自尊感情は状況によって変化する“状態自尊感情 (state self-esteem)”と比較的安定した“特性自尊感情 (trait self-esteem)”の2つに分けて捉えることが可能であると考えられる。前述したように、Leary et al. (1995)は、“他者から受容(拒否)されている程度を示す内的・主観的指標”を状態自尊感情とし、“時間や状況を通じた自尊感情の平均水準”を特性自尊感情としている。またJamesは、自尊感情には“成功や失敗によって上昇したり下降したりするもの”と、“フィードバック等に関連せず、人々が維持している平均的な水準”があるとしている(Heather-ton & Polivy, 1991)。これらを踏まえて、本研究では状態自尊感情と特性自尊感情を次のように定義する。すなわち、状態自尊感情は、“現時点の自分に対して感じる全体的な評価であり、日常生活の出来事などに対応して変動するもの”である。一方で、特性自尊感情は、“時間や状況を通じた自分に対して感じる全体的な評価であり、比較的安定しているもの”である。状態自尊感情と特性自尊感情は一定の関連を示すと考えられるが、状態自尊感情は特性自尊感情よりも、現時点の出来事の影響を受けて変動するものであると考えられる。なお、状態自尊感情に影響を与える出来事は、人にほめられるといったような他者からの評価だけではなく、成功や失敗体験なども含まれる。

現時点の自尊感情、すなわち状態自尊感情を測定する方法は大きく以下の3つにわけることがで

きる。第1は、Heather-ton & Polivy (1991)によって作成された状態自尊感情尺度 (state self-esteem scale)を用いる方法である。この尺度は、“この質問紙は、この瞬間考えていることを測定するためのものである”といった教示を行い、身体的魅力・能力・社会的受容の各領域における現時点の自己評価を測定している。日本においては、館・宇野 (2000)が同尺度を参考に日本語版状態セルフ・エスティーム尺度を作成している。第2は、Rosenberg (1965)の自尊感情尺度を用いる方法である。同尺度は、主に自尊感情の安定性に注目した研究で用いられている。たとえば、Kernis et al. (1989)や小塩 (2001)はこの尺度を同一対象者に短期間に複数回実施し、自尊感情の安定性を測定している。この短期間で揺れ動く自尊感情が“状態自尊感情”であり、状態自尊感情の値の変動の大きさが“自尊感情の安定性”として考えられている。第3は、特定の尺度を使用せず、研究者が適切と判断した測定指標を独自に用いる方法である。たとえば、“社会的に望ましい行動をした際に自分に対してどのように感じるか”という教示に沿って両極性の形容詞を使用する方法(Leary et al., 1995)や、“自分の自尊感情(プライド)はどのように変化したか”という項目を作成して測定する方法(清水, 1994)などがあげられる。

しかし、これらの測定方法にはいずれも問題点が存在する。Heather-ton & Polivy (1991)の尺度は身体的魅力や能力といった下位尺度からなる多次元構造をもち、特定領域の自己評価を個別に測定するといった特徴を有している。しかし、Kernis (2003)が指摘しているように、各個人が重要視している自己評価の領域は異なるため、特定領域の自己評価を合計して全体的な(global)自己評価、すなわち自尊感情とすることは困難であると考えられる。また、主に自尊感情の安定性を測定するために使用されるRosenberg (1965)の尺度は、評価的なフィードバックを与えても得点に変化しないという報告もあり(小林, 2004)、実験操作に

よって変化する状態自尊感情を測定することには適していない。さらに、「社会的に望ましい行動をした際に」といったように場面を限定している Leary et al. (1995) の測定方法は、状態自尊感情が社会的に望ましい行動をした時にのみ変化するとは考えにくいために、他の研究に使用することが難しいと考えられる。また、清水 (1994) のように、自尊感情の変化を直接聞く方法では、その時点の状態自尊感情を捉えることはできない。

以上の問題点を解決するためには、次の2つの条件を満たす尺度を開発することが必要であると考えられる。第1の条件は、現時点の自己に対する全体的な評価を測定するために、尺度の内的一貫性が高いことである。第2の条件は、状態自尊感情の変化があった時にその変化に対応して変動する尺度であることである。

そこで本研究では、Rosenberg (1965) の self-esteem scale の日本語版自尊感情尺度 (山本・松井・山成, 1982) をもとに、教示文および項目文を一部改変して状態自尊感情尺度を作成し、尺度の信頼性および妥当性の検討を行なう。Rosenberg の尺度は特性尺度としての一次元性が高く、妥当性も確認されている。同尺度の測定形式を現時点の自尊感情を尋ねる形式に変えることで、第1の条件を満たす尺度が作成できると期待できる。したがって、本研究の第1の目的は、状態自尊感情尺度の内的一貫性の検討である³⁾。

妥当性については、以下の点から検討を行なう。はじめに、作成した状態自尊感情尺度の得点が状況の変化に伴って変動するかどうか検討する (第2の条件の検討)。状態自尊感情は他者から受け入れられているという感覚によって上昇すると考え

られるため (Leary et al., 1995)、本研究で作成する尺度で測定された状態自尊感情と被受容感および被拒否感との関連を検討する。さらに、実験法を用いて課題達成の成功および失敗によって、状態自尊感情が変動するかどうかを検討する。したがって、本研究の第2の目的は、状態自尊感情尺度が、被受容感-被拒否感もしくは成功-失敗に伴う自尊感情の変化を捉えることが可能であるかどうか検討することである。

次に、状態自尊感情尺度と特性自尊感情尺度との間に弁別的妥当性があるかどうかを確認する。状態自尊感情尺度と特性自尊感情尺度は互いに一定の相関を示しながらも、特性自尊感情尺度よりも状態自尊感情尺度が最近の出来事に伴って変化しやすいことを明らかにする必要がある。前述した被受容感・被拒否感については、長期的な感覚を測定した場合には特性自尊感情とより関連すると考えられるため、比較的最近の受容・拒否経験に限定して被受容感および被拒否感の測定を行い、それらが特性自尊感情よりも状態自尊感情と関連するかどうか確認する。したがって、本研究の第3の目的は、受容・拒否経験の観点からの状態自尊感情尺度と特性自尊感情尺度の弁別性の検討である。

また、自尊感情と不安は負の相関を示すことから (Ciarrochi, Chan, & Bajgar, 2001)、特性-状態不安を取り上げる。特性不安は、長期的な性格特性としての不安水準であり、状態不安は短期間の緊張水準の変動により生じる不安水準である (清水・今榮, 1981)。今の不安の高さは今の自尊感情の高さと関連を示し、性格特性としての不安水準は比較的安定した自尊感情の高さと関連を示すと考えられる。そこで、状態自尊感情と状態不安、特性自尊感情と特性不安がそれぞれ異なった関連の仕方をするかどうか検討を行なう。したがって、本研究の第4の目的は、自尊感情と不安との関連からの状態自尊感情尺度と特性自尊感情尺度の弁別性の検討である。

3) 尺度の信頼性については、内的一貫性のみを検討して、再検査法は行なわない。なぜならば、状態自尊感情尺度の第2の条件としてあげられているように、状態自尊感情尺度はその時点の状況に対応して変動するといった特徴をもつことが重要であり、再検査法では信頼性を確認することができないためである。

なお、本研究は3つの研究から構成されており、前述した4つの目的と対応している。研究1では第1, 2, 3の目的について検討を行なう。研究2では、第2の目的について検討を行ない、研究3では第4の目的について検討を行なう。

研究 1

研究1では、状態自尊感情尺度の内的一貫性の検討を行なう。さらに、状態自尊感情尺度が特性自尊感情尺度と互いに一定の相関を示しながらも、特性自尊感情尺度よりも状態自尊感情尺度が最近の出来事により関連するかどうか、すなわち状態自尊感情尺度と特性自尊感情尺度の弁別性を確認する。なお、最近の出来事については、調査を授業内に実施するために“現時点の出来事”を測定することは困難であると考えられる。そのため、“この一週間であなたは周囲の人からどのような扱いを受けたと感じますか”という教示を行い、現時点に近い“一週間”という期間を設定し、他者から受容・拒否された感覚を測定した。

方法

2004年7月・2006年4月、都内私立大学生266名（男子86名、女子180名）に対し、心理学の講義の時間に質問紙調査を実施した。口頭および質問紙の表紙によって、質問紙調査への回答は自由意志であること、回答は統計的に処理され個人が特定されることはないことを説明した。質問紙は以下のとおりである。なお、不完全回答を

除外し、256名（男子82名、女子174名）を分析対象とした。

質問紙 (a) 状態自尊感情尺度：山本他(1982)の自尊感情尺度をもとに作成した。教示文は、測定時の感情状態について限定的に測定するために“これは、あなたが「いま」この瞬間に考えていることを測るためのものです。普段ではなく「いま」の自分が考えていることです。”とした。また、各項目文が“いま、…感じる”となるように文章を一部修正した(Table 1)。“あてはまる(5)”“どちらかというにあてはまる(4)”“どちらともいえない(3)”“どちらかというにあてはまらない(2)”“あてはまらない(1)”までの5件法で回答を求めた。(b) 特性自尊感情尺度：状態自尊感情尺度との相違を明確にするため、山本他(1982)の自尊感情尺度を一部改変して作成した。教示文は“これは、あなたが「ふだん」考えていることを測るためのものです。今ではなく「ふだん」あなたが考えていることです。”とした。また、各項目文が“ふだん、…感じる”となるように文章を一部修正した。回答形式は状態自尊感情尺度と同じであった。(c) 被受容感・被拒否感：“この一週間であなたは周囲の人からどのような扱いを受けたと感じますか。個々の経験を細かく考えるのではなく、全体的な感じでお答えください”と教示し、その際に他者から“ほめられた”など受容された感覚について4項目、“けなされた”など拒否された感覚について4項目を尋ねた(Table 2)。回答

Table 1 状態自尊感情尺度の平均値と標準偏差および主成分分析結果

(N=256)

項目	M	SD	第1主成分負荷
1 いま、自分には人並みに価値のある人間であると感じる。	3.34	1.18	.73
2 いま、自分には色々な良い素質があると感じる。	3.11	1.12	.75
3 いま、自分は敗北者だと感じる。	3.43	1.22	.55
4 いま、自分は物事を人並みにうまくやれていると感じる。	3.16	1.05	.57
5 いま、自分には自慢できる場所がないと感じる。	3.14	1.24	.54
6 いま、自分に対して肯定的であると感じる。	3.18	1.13	.67
7 いま、自分にほぼ満足を感じる。	2.65	1.23	.54
8 いま、自分はだめな人間であると感じる。	2.98	1.24	.72
9 いま、自分は役に立たない人間であると感じる。	3.28	1.21	.76

形式は状態自尊感情尺度と同じであった。

結果と考察

尺度の内的一貫性について検討を行なうために、状態自尊感情尺度 10 項目に対して主成分分析を行なった。その結果、1 項目“いま、自分をもっと尊敬できるようになりたいと感じる (-.19)”を除く 9 項目が第 1 主成分に高い負荷量を示し、同項目を分析から除外して再度分析を行なったところ、すべての項目が高い負荷を示した (Table 1)。第 1 主成分の寄与率は、42.7% であった。この 9 項目への回答の信頼性係数を算出したところ、 $\alpha = .83$ と十分な高い値が得られた。逆転項目を処理して 9 項目の合計得点を算出し、状態自尊感情得点 ($M=28.28, SD=6.89$) とした。なお、得点の男女差 (男子: $M=28.44, SD=6.94$, 女子: $M=28.20, SD=6.89$) について検討を行なったところ、有意な差は認められなかった ($t(254)=0.26, n.s.$)。

特性自尊感情尺度 10 項目に対しても同様の分析を行なったところ、状態自尊感情尺度の削除項目に対応する 1 項目“ふだん、自分をもっと尊敬できるようになりたいと感じる” (-.14) が除外された。第 1 主成分の寄与率は 48.4% であった。この 9 項目への回答の信頼性係数を算出したところ、 $\alpha = .86$ という値が得られた。逆転項目を処理して 9 項目の合計得点を算出し、特性自尊感情得点 ($M=28.52, SD=7.40$) とした。

状態自尊感情および特性自尊感情尺度において同様に負荷量の低かった 1 項目 (自分をもっと尊敬できるようになりたい) については、他の研究 (e.g. 水間, 1996 ; 谷, 2001) においても分析中に除外されている。田中・上地・市村 (2003) が指摘しているように、“尊敬”の言葉を自分に対して使用していることが、回答者の項目文に対する理解を妨げていると考えられる。

被受容感・被拒否感の 8 項目については因子分析 (主因子解, バリマックス回転) を行なった。複数の因子に負荷量が高かった 1 項目 (受け入れ

Table 2 被受容感・被拒否感の因子分析結果

($N=256$)

項目	I	II	共通性
4 けなされた	.75	.15	.59
6 気持ち悪がられた	.74	.05	.55
8 さげすまれた	.73	-.09	.55
2 避けられた	.58	-.10	.35
3 ほめられた	-.04	.80	.65
7 価値を認めてもらった	-.07	.61	.38
5 面白がられた	.08	.54	.30
因子寄与	2.00	1.35	
寄与率	28.58	19.28	

られた) を削除して再度因子分析を行なったところ、固有値は順に 2.48, 1.87, 0.71 となり、2 因子を抽出した (Table 2)。累積寄与率は、47.9% であった。第 1 因子は“けなされた”など他者からの拒否を示す項目が負荷していたため“被拒否感”因子 ($\alpha = .79$) と命名した。第 2 因子は“ほめられた”など他者からの受容を示す項目が負荷していたため“被受容感”因子 ($\alpha = .67$) と命名した。各因子に高い負荷を持つ項目の合計を算出し、被拒否感 ($M=8.54, SD=3.55$) および被受容感 ($M=9.34, SD=2.66$) の得点とした。

妥当性を検討するために、状態自尊感情と被拒否感および被受容感との間の相関係数を算出したところ、被拒否感との間に有意な負の相関 ($r = -.31, N=256, p < .01$)、被受容感との間に有意な正の相関 ($r = .34, N=256, p < .01$) をそれぞれ示した。特性自尊感情についても同様の分析を行なったところ、被拒否感との間に有意な負の相関 ($r = -.32, N=256, p < .01$)、被受容感との間に有意な正の相関 ($r = .36, N=256, p < .01$) をそれぞれ示した。また、状態自尊感情と特性自尊感情の相関係数を算出したところ、有意な正の相関 ($r = .74, N=256, p < .01$) を示した。

以上から、他者から受容されていると感じると状態自尊感情尺度は高くなり、拒否されていると感じると状態自尊感情は低くなることが明らかにされた。しかし、特性自尊感情についても被受容

感および被拒否感と同様の関連が示され、状態自尊感情と特性自尊感情の弁別性は明らかにされなかった。一週間の被受容感および被拒否感が状態自尊感情とも特性自尊感情とも同程度の正の相関を示したことは、“一週間の出来事”が状態自尊感情を変動させる“現時点に近い短期的な出来事”であるだけでなく、特性自尊感情と関連する“時間を通した長期的な出来事”としても捉えることが可能であったためだと考えられる。

研究 2

研究 2 では、本尺度が状態自尊感情の変化があった時にその変化に対応して変動する尺度であるかどうかを検討するために、実験法を用いて研究参加者に肯定的もしくは否定的な評価（フィードバック）を与え、課題成功・失敗に伴って状態自尊感情の得点が変わるかどうかを分析する。成功を示す肯定的な評価を受けた研究参加者の状態自尊感情は上昇し、失敗を示す否定的な評価を受けた研究参加者の状態自尊感情は低下すると予想される。

方法

2005 年 12 月・2006 年 1 月、都内私立大学生 52 名（男子 20 名、女子 32 名）を対象に、2 コマ連続の授業時間を利用し、2 つのクラスで集団実験を行なった。この 2 つのクラスは、同大学同学科同学年から構成されるクラスであり、一方のクラスには学籍番号の偶数・奇数を基に肯定的・否定的フィードバックのどちらかが与えられた。もう一方のクラスについてはクラス全員をフィードバックなし群とし、フィードバックを与えることはしなかった。なお、実験に要した時間は約 90 分であった。

実験概要 はじめに研究参加者は作業課題を行い、作業課題終了後に 1 回目の状態自尊感情の測定を行なった。その後、肯定的・否定的のいずれかの評価的フィードバックを受けた（肯定的フィードバック群 12 名・否定的フィードバック群

12 名）。また、統制群として、フィードバックを受けなかったフィードバックなし群（28 名）を設定した。次いで、2 回目の状態自尊感情尺度の測定を行なった。

実験計画は、評価的フィードバック（3；肯定的フィードバック・否定的フィードバック・フィードバックなし群）×測定時期（2；前・後）の 2 要因の混合計画であった。評価的フィードバックが被験者間要因、測定時期が被験者内要因である。

手続き 1. 実験協力者（授業の担当教員、第 2 著者）が大学から協力依頼をされたと説明し、実験者（第 1 著者）を紹介した。実験者は“現在、大学と企業の合同で就職の適性を測るためのテストを作成している”と教示し、さらに“このテストはまだ開発段階であり、さらに洗練されたものを作成するために協力してほしい”と依頼した。協力の謝礼として、このテストへの参加は授業のクレジットとして加点され、一人ずつ診断結果をすぐに渡すと説明した。

2. 実験者が説明した“テスト”は“就職適性テスト”と題された作業課題であった。この作業課題は本研究のために作成され、計算問題や単語完成課題等が含まれ、5 ページから構成されていた。作業課題をはじめのまゝに、実験者は“1 ページを 3 分で行なうこと”と教示し、3 分経過するたびに合図をした。

3. 作業課題終了後、実験者が個別に回収した。採点のために実験者は解答用紙を持って退出した。その後、実験協力者が“授業内で使用する”と説明し、研究 1 で作成された状態自尊感情尺度への回答を求めた。

4. 記入後、実験結果に影響を与えないように配慮して構成された“心理測定法に関する講義”を 40 分間行ない、10 分の休憩時間をとった。

5. 休憩時間終了後に実験者がふたたび入室し、各研究対象者は実験者から手渡しで作業課題の結果（評価的フィードバック）を受け取った。結果

は、肯定的フィードバックもしくは否定的フィードバックのどちらか一方が与えられた。肯定的フィードバックでは、結果は“全て平均以上であり、AからDまでの5段階評価でA”とし、一方で否定的フィードバックについては、“全てにおいて平均以下であり、AからDまでの5段階評価でD”と記載されていた。フィードバックなし群については手続き5を飛ばして、手続き6に移った。

6. 再度、質問紙調査を実施した。質問紙は、状態自尊感情尺度（研究1で作成されたもの、9項目5件法）、フィードバック操作のチェック項目（問題の難易度について“易しい”から“難しい”、テストの出来具合について“悪い”から“良い”の7件法でそれぞれ回答を求めた）、その他（心理特性を測定する尺度が複数含まれていたが、解析の対象としていないため本論文では記述しない）から構成されていた。

7. 全研究参加者に対して、デブリーフィングを行なった。具体的な内容は以下のとおりである。はじめに実験の目的等を説明し、実験者および実験協力者が謝罪を行なった。さらに、各参加者に配布されたフィードバックはランダムに与えられたものであり、各参加者の本当の能力を示すものではなかったことを説明した。最後に、研究論文として発表することへの同意を求めた。

結果と考察

評価的フィードバックの各群によって作業課題（就職適性テスト）の難易度認知が評価的フィードバックの各群において異なっていなかったかどうかを確認するため、7件法で尋ねた難易度評価を条件ごとに比較した。その結果、肯定的フィー

ドバック群 ($M=4.27, SD=1.34$)、否定的フィードバック群 ($M=5.08, SD=1.38$)、フィードバックなし群 ($M=5.18, SD=1.19$)の3群に平均値の有意な差はなかった ($F(2,49)=2.08, n.s.$)。さらに、作業課題の出来具合について7件法でたずねた項目を条件ごとに比較したところ、肯定的フィードバック群 ($M=3.35, SD=2.02$)、否定的フィードバック群 ($M=2.00, SD=1.53$)、フィードバックなし群 ($M=2.50, SD=1.29$)の3群間に有意傾向であったものの差がみられた ($F(2,49)=2.79, p<.10$)。

以上から、作業課題の難易度についてはフィードバックの各群で差が認められなかったが、作業課題の出来具合については差があることが示唆された。各フィードバック群の作業課題の出来具合の得点の平均値を見ると、肯定的フィードバック群は自分の出来を高いと評価しており、否定的フィードバック群は自分の出来は低いと評価していることが伺える。これらの結果から、実験操作は妥当であったと判断された。

次いで、状態自尊感情尺度を従属変数として、3（評価的フィードバック）×2（測定時期）の2要因の分散分析を行なった。その結果、交互作用が有意であった ($F(2,49)=4.53, p<.05, Table 3$)。単純主効果の検定を行なったところ、肯定的フィードバック群において測定時期の単純主効果が有意傾向であり ($F(1,49)=3.52, p<.10$)、否定的フィードバック群においても測定時期の単純主効果が有意傾向であった ($F(1,49)=4.04, p<.10$)。フィードバックなし群では有意でなかった ($F(1,49)=2.06, n.s.$)。すなわち、肯定的フィードバック群ではフィードバック前より後の状態自尊感情得点が高

Table 3 フィードバック前後の各群の状態自尊感情得点の平均値および標準偏差

	フィードバック					
	肯定的 (N=12)		否定的 (N=12)		なし (N=28)	
	M	SD	M	SD	M	SD
フィードバック前	31.83	9.63	29.83	6.85	28.21	7.89
フィードバック後	34.17	8.14	27.33	8.50	30.00	6.75

くなり、否定的フィードバック群ではフィードバック前より後の状態自尊感情得点が低くなっていった。フィードバックなし群では、フィードバック前後の状態自尊感情得点に差がみられなかった。

以上から、状態自尊感情は課題達成の成功によって上昇し、失敗によって低下する傾向にあることが示された。

研究 3

研究3では、自尊感情と不安との関連から状態自尊感情尺度と特性自尊感情尺度との弁別性を検討する。状態自尊感情は状態不安と、特性自尊感情は特性不安とそれぞれ弁別的に関連すると予想される。

方法

2004年7月・2006年4月、都内私立大学生220名（男子77名、女子143名）に対し、心理学の試験および講義の時間に質問紙調査を実施した。口頭および質問紙の表紙によって、質問紙調査への回答は自由意志であること、回答は統計的に処理され個人が特定されることはないことを説明した。質問紙は以下のとおりである。なお、不完全回答を除外し、213名（男子73名、女子140名）を分析対象とした。

質問紙 (a) 状態自尊感情尺度：研究1で作成されたもの、9項目5件法。(b) 特性自尊感情尺度：研究1で作成されたもの、9項目5件法。(c) 特性・状態不安尺度：日本語版 STAI（清水・今栄, 1981）を使用した。特性・状態不安はそれぞれ20項目で測定される。本研究では、対象者が混乱することを防ぐために、教示文および回答方法を一部改変し、“あてはまる”から“あてはまらない”までの5件法で回答を求めた。

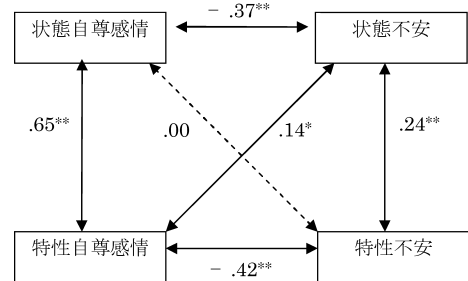
結果と考察

はじめに、状態自尊感情 ($M=27.57, SD=6.97$) および特性自尊感情 ($M=28.01, SD=7.32$) と、状態不安 ($M=56.78, SD=16.69$) および特性不安 ($M=63.55, SD=13.60$) の相関係数を算出した

Table 4 状態・特性自尊感情と状態・特性不安の間の相関係数

	1	2	3	4
1 状態自尊感情		.76**	-.51**	-.53**
2 特性自尊感情	(213)		-.37**	-.62**
3 状態不安	(213)	(213)		.42**
4 特性不安	(213)	(213)	(213)	

注. 右上は相関係数, 左下 () は有効標本数を示す。
** $p<.01$



※ * $p<.05$, ** $p<.01$

Figure 1 他の変数を統制変数とした際の2変数間の偏相関係数

(Table 4)。その結果、状態自尊感情は状態不安および特性不安と有意な負の相関を示した。さらに、特性自尊感情についても特性不安および状態不安と有意な負の相関を示した。これは、状態自尊感情と特性自尊感情、状態不安と特性不安の間のそれぞれの相関が高いためと考えられる。そこで、他の2変数を統制変数として2変数間の偏相関係数を算出した (Figure 1)。その結果、状態自尊感情と状態不安、特性自尊感情と特性不安の間にそれぞれ有意な高い負の相関が示された。その一方で、状態自尊感情と特性不安との間の相関は有意ではなく、特性自尊感情と状態不安との間の相関は有意であるが値は低かった。

以上から、状態自尊感情と状態不安、特性自尊感情と特性不安との間にそれぞれ明確な関連が示された。一方で、状態自尊感情と特性不安、特性自尊感情と状態不安の間には相関はほぼ認められなかった。したがって、状態自尊感情と特性自尊

感情の弁別性が明らかにされ、状態自尊感情尺度の妥当性が確認された。

総合考察

本研究では、従来の状態自尊感情の測定方法を整理し、状態自尊感情尺度には2つの条件が必要であると考えた。第1に、自己に対する全体的な評価を測定するために内的一貫性が高いこと、第2に状態自尊感情の変化があった時に変化に対応して変動する尺度であることであった。そこで、Rosenberg (1965) の self-esteem scale の日本語版自尊感情尺度 (山本他, 1982) を一部改変し新たに状態自尊感情尺度を作成した。

尺度の信頼性および妥当性の検討については、4つの目的から構成される3つの研究を行なった。第1の目的は、作成された状態自尊感情尺度の内的一貫性の検討であった。研究1において、本尺度は高い内的一貫性を持つことが明らかにされ、状態自尊感情尺度の第1の条件を満たす尺度であることが確認された。第2の目的は、本尺度が被受容感-被拒否感もしくは課題達成の成功-失敗に伴う自尊感情の変化を捉えることが可能であるかどうか検討することであった。本尺度によって測定された状態自尊感情は、最近一週間の被受容感および被拒否感と明確な関連を示し (研究1)、成功・失敗に伴って上昇もしくは低下する傾向がみられた (研究2)。したがって、本尺度は短期間の状態自尊感情の変動を捉えており、第2の条件を満たした。第3および第4の目的は、状態自尊感情尺度と特性自尊感情尺度の弁別性の検討であった。受容・拒否の観点から検討を行なった研究1では、最近一週間の被受容感および被拒否感の測定を行なったために、2つの尺度の弁別性については明らかにされなかった。一方で、不安の観点から検討を行なった研究3では、状態自尊感情尺度と状態不安尺度、特性自尊感情尺度と特性不安尺度がそれぞれ有意な相関を示した。したがって、自尊感情を測定する2つの尺度の弁別性

が確認された。すなわち、状態自尊感情尺度は特性自尊感情尺度よりも測定時の自尊感情の状態を正確に捉えることができる。以上の結果から、作成された状態自尊感情尺度が高い信頼性と妥当性を備えた尺度であるといえる。

しかし、本研究には課題も残されている。研究1および研究2において、状態自尊感情尺度が状況の変化に伴って変動するかどうかを確認するために、他者からの評価および課題達成状況を取り上げた。自尊感情は、モラル違反や逸脱行動をすることによっても変動すると考えられることから (Crocker, Luhtanen, Cooper, & Bouvrette, 2003)、自尊感情の変動を引き起こす状況については検討が必要である。さらに、評価的フィードバックを受けた際に、特性自尊感情が状態自尊感情に比べて変化しにくいことを示す必要もあるであろう。また、本研究は尺度開発の初期段階であるために、対象者を大学生に限定して研究を行なった。さらに洗練された尺度を開発するためには、他の年代にも実施して、尺度の汎用性に関して更なる検討が必要であると考えられる。

近年、自尊感情の概念の曖昧さ (遠藤, 1999) など、自尊感情研究の問題点が指摘されるようになり、自尊感情を見直す必要性が求められている。すでに述べたように、低下した自尊感情の回復に注目した研究 (清水, 1994) のようにある時点の自尊感情の変化に注目した研究や、短期間の複数回測定における自尊感情の変動の個人差に注目した研究 (Kernis et al., 1989; 小塩, 2001) など自尊感情の変動に注目した研究は、自尊感情を見直す新たな視点としてあげられる。自尊感情の現時点の状態を捉えることのできる本尺度を使用することによって、これらの自尊感情の変動に関する研究知見を相互比較することが可能となる。また、臨床的介入による自尊感情の改善効果を測定する際にも本尺度は利用可能であると考えられる。この結果、自尊感情研究に新しい知見をもたらすことが期待できるであろう。

引用文献

- Ciarrochi, J., Chan, A. Y., & Bajgar, J. (2001). Measuring emotional intelligence in adolescents. *Personality and Individual Differences*, **31**, 1105–1119.
- Crocker, J., Luhtanen, R. K., Cooper, M. L., & Bouvrette, A. (2003). Contingencies of self-worth in college students: Theory and measurement. *Journal of Personality and Social Psychology*, **85**, 894–908.
- 遠藤由美 (1999). 「自尊感情」を関係性からとらえ直す 実験社会心理学研究, **39**, 150–167.
- Heatherton, T. F., & Polivy, J. (1991). Development and Validation of a Scale for Measuring State Self-Esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, **60**, 895–910.
- 磯部智加衣・浦 光博 (2002). 内集団成員との上方比較後の感情・状態自尊心に、集団間上方比較と特性自尊心が及ぼす影響 実験社会心理学研究, **41**, 98–110.
- James, W. (1892). *Psychology: Briefer course*. London: Macmillan.
(ジェームズ, W. 今田 寛 (訳) (1992). 心理学 (上) 岩波文庫)
- Kernis, M. H. (2003). Toward a conceptualization of optimal self-esteem. *Psychological Inquiry*, **14**, 1–26.
- Kernis M. H., Grannemann, B. D., & Barclay, L. C. (1989). Stability and level of self-esteem as predictors of anger arousal and hostility. *Journal of Personality and Social Psychology*, **56**, 1013–1023.
- 小林知博 (2004). 成功・失敗後の直接・間接的自己高揚傾向 社会心理学研究, **20**, 68–79.
- Leary, M. R., Tambor, E. S., Terdal, S. T., & Downs, D. L. (1995). Self-esteem as an interpersonal monitor: The sociometer hypothesis. *Journal of Personality and Social Psychology*, **68**, 518–530.
- 水間玲子 (1996). 自己嫌悪尺度の作成 教育心理学研究, **44**, 296–302.
- 小塩真司 (2001). 自己愛傾向が自己像の不安定性、自尊感情のレベルおよび変動性に及ぼす影響 性格心理学研究, **10**, 35–44.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- 清水秀美・今栄国晴 (1981). STATE-TRAIT ANXIETY INVENTORY の日本語版 (大学生用) の作成 教育心理学研究, **29**, 62–67.
- 清水 祐 (1994). 失敗経験と援助行動意図との関係について——低下した自尊感情回復のための認知された援助の道具性—— 実験社会心理学研究, **34**, 21–32.
- 舘 有紀子・宇野善康 (2000). 日本版状態セルフ・エスティーム尺度の検討 日本社会心理学会第41回大会発表論文集, 206–207.
- 田中道弘・上地 勝・市村國夫 (2003). Rosenberg の自尊心尺度項目の再検討 茨城大学教育学部紀要 (教育科学), **52**, 115–126.
- 谷 冬彦 (2001). 青年期における同一性の感覚の構造——多次元自我同一性尺度 (MEIS) の作成—— 教育心理学研究, **49**, 265–173.
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, **30**, 64–68.

Development of State Self-esteem Scale

Miho ABE¹ and Hiroyuki KONNO²

¹Doctoral Program in Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba

²Faculty of Humanities, Mejiro University

THE JAPANESE JOURNAL OF PERSONALITY 2007, Vol. 16, No. 1, 36-46

The purpose of this study was to develop state self-esteem scale, based on the self-esteem scale by Rosenberg (1965). Study 1 showed that the new state scale had high internal consistency. Results also indicated that state self-esteem had a positive correlation with senses of being included by others, and a negative one with the sense of being excluded. In Study 2, an experiment was conducted that used an evaluation feedback. Results showed that state self-esteem increased after positive evaluation, and decreased after negative evaluation by others. In Study 3, the correlation between state self-esteem and state anxiety was examined for discriminant validity. Results indicated the correlation was negative. Thus, the new scale was shown to have good reliability and validity.

Key words: state self-esteem, reliability, validity